一宮市博物館　　1995. 3

# 博物館だより

No.19

## 企画展「藍華やぐ—染めと織り—」

平成7年4月28日(金)から5月28日(日)まで

鳳凰(筒描)

庶民の色・藍と木綿。これは江戸時代に強制されたものであった。その染めは、濃紺から浅黄まで幾段階にもわたり色が作り出され、愛用された。制約された日常での彼らの美意識の追求が伺われよう。本展覧会は、こうした庶民生活の哀歓を「祝い染め」の世界に探るものである。出品作品は、「誕生」関係で—湯あげ、子負い帯等、「嫁入り」—祝い風呂敷、夜着・布団地、油簞等、「万祝い」着、祝い文字（喜、寿、願…）等々を予定している。

平成６年７月17日、石刀神社の虫干しの際、今まで知られていなかったからくり人形が発見されました。今回は、民俗芸能研究家鬼頭秀明氏に、そのからくり人形にかかわる論考をご寄稿いただきました。

## 民俗探訪(5)

石刀神社の乱杭渡り人形
——新出の山車からくり人形——

民俗芸能研究家　鬼頭秀明

平成６年７月、一宮市今伊勢町馬寄の石刀神社から、地元でも知られていなかった山車からくり人形が発見された。それは、現存する遺品の少ないからくり人形、乱杭渡りであった。本稿では、石刀祭の歴史を見ながら、紹介することにしたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

### １.石刀神社と山車からくり人形

石刀神社は一宮市今伊勢町馬寄に鎮座する、この地方の中心となる神社である。古くは、石刀天神、神明宮、豊受宮を祀ることから、三明神とも呼ばれ、木曽川の氾濫により現在地へ流れ着いた、と伝えられる古社である。本殿などの社殿は西を向いて建てられている。

石刀祭とも称される例祭は、４月19日に行われる。氏子の地区から神社へ奉納される山車とオマントと呼ばれる飾り馬は、現在では19日以降の日曜日となっている。葉桜の下、それらが長い参道をゆっくり進む光景は、尾北地方における春の風物詩だ。しかし、今では春祭りだが、江戸時代においては８月すなわち秋祭りであった。また、この祭りには、尾張地方の古い祭礼風俗の一つ、頭人祭の面影を残すことでも知られている。

山車がいつから石刀祭に登場するようになったのかは判らない。しかし、社伝によれば慶長13年（1606）には山車２輌が出されていたという。しかし、どのような状況であったかまでは伝わっていない。さらに、宝暦７年（1757）の奥書きがある『尾陽村々祭礼集』(注-1)には、

中島郡　　馬寄村

一　氏神三明神祭禮八月十九日、山車三輌馬の塔五疋、右社大門四町程之間引渡、右社木全清三郎社僧剱福寺扣。(但車一輌は猩々、一輌は神子湯立、一輌は道成寺、各絲からくり、打囃子笛太鼓、人形並幕水引共木綿、綱なしに跡より押ス)

とあり、これにより江戸時代中期、山車は３輌で、猩々、神子湯立、道成寺のからくり人形が乗せられていたことが判る。

江戸時代後期の嘉永４年(1851)、尾張の儒学者であった細野要斎が馬寄村を訪れて、祭礼を見学し、『感興漫筆』(注-2)へ次の様に記している。

（八月）

廿日、朝より雨降しが、午時に至て晴る。茂平治麺　温飩を製して饗す。午後、予を導て馬寄村に至る。馬寄村は一之宮え北東、馬引村よりは半里余なり。里社昨日を定日とす。然るに雨降を以て今日とす。神祠は村の北辺にあり、幟に三陽大明神としるすを所々に立つ。飾り馬走り、馬四十疋の余を出す。車楽三輌あり、祠前の路を西より曳来て、三輌を比ぶ。馬を走らしむるの際は、偶人を躍らしむる事を許さず。未の下より馬を走しめて、申の下に至る。馬皆走て後、車楽を奏、偶人を躍しむ。

三輌共偶人ハ出サズ、伎ヲナスニ及ンデ中ヨリ出ス。

袈裟衣ヲ着シタル僧出テ、合掌シテ退ク。

唐子、下駄ヲハキ、杭ニ乗テ出、四本ノ杭ヲ次第ニ歩シ、顔シバカケ物ヲ出ス。カケ物ニ日月トアリ、木ノ上ニ丸キ物アリ、二ツニワレテ中ニ僧アリ、後光ノ形ヲアラハス。何ノ故タルヲ詳ニセズ。前ニ案アリ、右ノ旁後ニ近キ方ニ牡丹アリ、唐子出テ牡丹ヲ持躍リ、旁ナル牡丹ヲ一枝折取テ前ノ案ニサス。又躍ル。案上ノ牡丹変ジテ獅子トナリヲドル。唐子ノ持タル牡丹モ亦獅子トナル。唐子出テ、上ヨリ下ゲタル木ニトマリテ次第ニ身ヲ瓢シテ木ヲツタル。終ニカケ物トナル。

コノ車ヨリ次第ニ北ニ及ブ、一輌伎ヲ奏シテ次ニ及ブ、薄暮訖ル。

このように細野要斎が見た山車は3輌で、からくり人形は乱杭渡り、牡丹から獅子に変身、綾渡りであった。どこの地区かは記していないが、恐らく呑光寺・更屋敷・大聖であろうと思われる。

しかし、昭和20年までは5輌の山車があった。山車の数が急に増えたのか、それとも以前から他にも曳かれていたのかは判らない。太平洋戦争により呑光寺と更屋敷の2輌が焼失したので3輌になってしまったのである。現存するのは、山之小路、中屋敷、大聖の山車である。各山車のからくり人形は、倒立と綾棒下がりの複合、大車輪（鉄棒）、綾渡りで、今でも神前だけでその技を奉納している。これらのからくり人形で、細野要斎が誌しているのは、大聖の綾渡りだけで、どうしたことか他の2輌には全く触れていない。

石刀祭りの山車の構造は、三層外輪で唐破風の屋根を四本柱が支える「犬山型」とよばれるものである。犬山型は犬山市の針綱神社祭礼で発達した山車形態だ。他に犬山型の山車は、小牧・岩倉等に分布している。からくり人形は神前においてだけ、一番上の四本柱内で演じられる。また、小牧では山車が歌舞伎の舞台となり、子供芝居を演じた。

## 2.神社の蔵から乱杭渡り人形

愛知県の尾張地方には数多くのからくり人形が山車の上に乗せられているが、今回発見された人形は「乱杭渡り」であった。乱杭渡りは、高さの異なる杭の上を操作する人や仕掛けも見えないのに、次々と渡っていくものである。

石刀神社の宝蔵に乱杭渡りの人形は眠っていた。

石刀神社乱杭渡り人形の杭

出てきた当初は焼失した呑光寺の人形が乱杭渡りだったので、その遺品が残存していたのではないかと思った。ところが話を聞いていくうちに、それは山之小路の山車でかつて使用されたものであることが判明した。すなわち、山之小路地区より神社へ奉納された祭礼道具の中から、人形が出てきたからである。太平洋戦争後に山車蔵整理のため神社の宝蔵へ収められたため、当時その指導をされた木全名誉宮司も、人形の存在には気づかれなかったという。また、地元にも詳しい内容を御存知の方はおられなかった。だから誰もこの人形が動いた姿を見ていない。さらに記録でも山之小路の山車に乱杭渡りのからくり人形を乗せていたことは記されていないのである。正に幻の山車からくり人形の出現といえよう。

蔵の中から出てきた乱杭渡りのからくり人形が山之小路のものだとすると、石刀神社の山車には乱杭渡りが二つの山車に乗っていたことになる。確認例の少ない乱杭渡りが、一つの祭りに二か所あったとは、本当に驚きだ。

それでは細野要斎が嘉永4年（1851）に見た乱杭渡りは、どちらのものなのであろうか。現存する人形遺品から考えると、焼失した呑光寺の方であったと思われる。要斎の記述によれば、その乱杭渡りは演出上において全く犬山祭の真先(車山)と同じなのである。またまた大きな問題が発生してしまった。すると僧は日蓮ということになり犬山唯一と思われていた日蓮の夢物語の乱杭渡りの山車からくり人形が、二つ存在したことになるのである。

現在、山之小路の山車で操られているからくり人形は、２体の唐子により逆立ちと綾棒下りを演ずる複合技のからくり芸である。この人形は、もともと文政７年（1824）に現在の西枇杷島町問屋町の山車人形として作られたものである。弘化３年（1846)、問屋町が山車と人形を新造したので、小牧の横町が譲り受けたものである。さらに、安政３年(1856)、横町が新しい曲芸人形を作ったので、それまで遣っていた西枇杷島からの旧人形の内、大将だけを残して山之小路に移されたとも考えられている(注-3)。従って現在の人形は安政３年もそれほど降らない頃に、山之小路の山車でからくり芸を披露するようになったことになる。このように見ていくと、乱杭渡りの人形は、先の人形に替えられるまで、山之小路の山車に乗せられていたことになろう。古い人形遺品がそのまま地元で残された稀な例とでもいえよう。また、人形を年により交替で遣ったことも考えられる。しかし、要斎が嘉永４年（1851）に見たのは３輌であり、山之小路の山車は記されていないと思われるので、先程から述べているように、どのように山車の数が変遷したのかを、これからも注意する必要があろう。

因に発見された乱杭渡りの人形遺品は、人形胴体・首・杭（５本)・額・キリなどである。

## ３.乱杭渡り人形の周辺

乱杭渡りの山車からくり人形は、今まで次の所が知られていた。

①犬山市魚屋町の真先（車山)
②碧南市大浜中区の中之切車
③岩倉市大上市場(注-4)

犬山市魚屋町の乱杭渡り人形

このように３か所の山車である。しかし、③の岩倉市大上市場の乱杭渡り人形は、近年作り直されて構造が変わってしまっているが、もともと地元の人が犬山の人形を祭のどさくさに紛れて盗み見て作ったものといわれる。だから資料になるものは①の犬山と②の碧南、この二か所だけである。

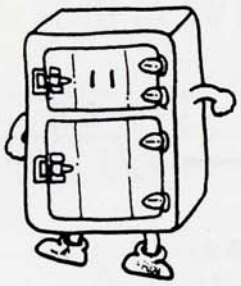
犬山が安永３年(1774)、碧南が天明８年(1788)に乱杭渡りの人形を製作している。今回見つかった石刀神社のものは、既に紹介したように下限を安政３年（1856）と考えるならば、その製作時期は先の２例とあまり大差ない頃と思われる。さらに作者も両者ともに竹田藤吉なので、同人あるいは竹田派工房の手になるものと考えられよう。

先述したように、犬山祭の乱杭と全く演出が同様であるからくり人形が太平洋戦争で焼失した石刀祭の山車でも見られた。すると、これも竹田藤吉一派の製作した可能性が高かったであろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

石刀神社の祭礼には、これまで紹介してきたように乱杭渡りのからくり人形が、二つの山車に乗っていた。今回発見されたのはその存在さえも知られなかったものだ。壊れているからくり人形の遺品といえども、基本部分が良好に残り、よく散逸せずに蔵の中で眠っていたものである。この人形の発見により、これまで幻の山車からくり人形ともいわれた、乱杭渡りの人形構造などの資料が一つ増え、その謎の解明も前進するだろう。これからの愛知の山車からくり人形研究には欠くことができない資料である。

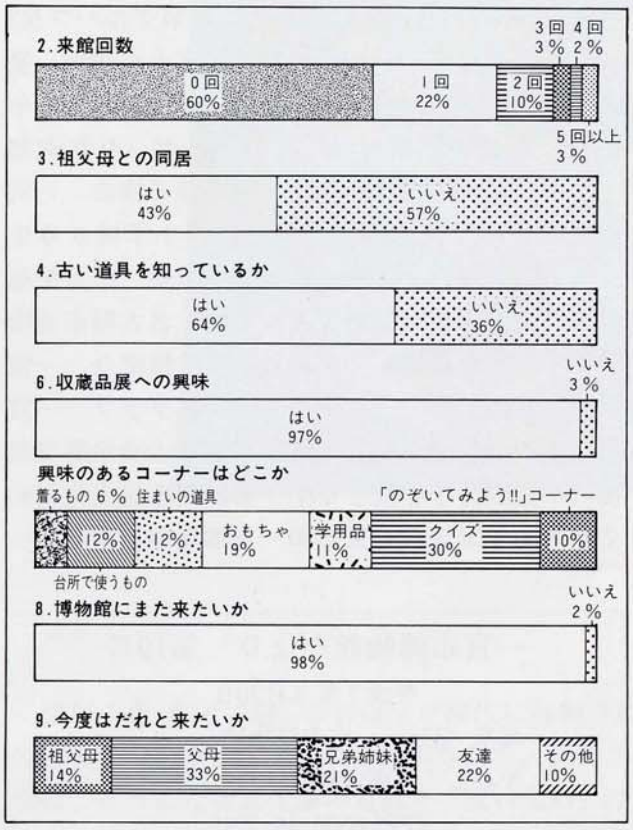
(注-1)石田元季「尾陽村々祭禮集に就いて」、『紙魚』第21冊・昭和３年
(注-2)『名古屋叢書』第19巻・随筆編(2)昭和35年・名古屋市教育委員会
(注-3)岡崎朝彦『西枇杷島由緒あるき』昭和54年・愛知県西枇杷島町
(注-4)安政５年(1858)、細野要斎が岩倉の祭礼に来ており、上市場のからくり人形は乱杭渡りであった、と『感興漫筆』に記している。しかし、時間が早かったので見ることはできなかったという。



## 最近の博物館

収蔵品展
「くらしの道具
－今と昔－」

平成３年度から一宮市博物館では、歴史を初めて学習し始める小学校３年生を対象に、収蔵資料を展示する企画を行なってきました。教育の現場からの要請を受けて始まったこの展示も、今年で４回目になります。この展示では、洗濯板・たらいと洗濯機、ワラゾウリと運動靴など、古いものと新しいものを並列して展示し、子供が目で比較できるようにしています。今年は、試行錯誤のあった先年までのものに、「のぞいてみよう！！」という昔の台所を復原したコーナーを増設することもできました。市内の小学校３年生3000人あまりが見学に来ました。また、アンケート調査を行なったところ、土・日に来館する小学生の半数近くが市外の子供たちであることもわかり、また、稲沢東小学校・祖父江小学校・新川小学校など市外の小学校からの団体見学もあるなど、この展示が定




アンケートの集計結果

展示室のようす

着してきたことを非常にうれしく思う年でもありました。

今回は、そのアンケート調査の一部をご紹介したいと思います。アンケートの内容は、

1．学校は、どこですか？（学校単位で来館する以外の小学生）
2．博物館には、今まで何回来たことがありますか？
3．おじいさん・おばあさんといっしょに住んでいますか？
4．古い道具で、見たことのあるものが展示してありましたか？ それは、何ですか？
5．印象に残ったものは、何ですか？
6．「くらしの道具」展は、おもしろかったですか？ 何がおもしろかったですか？
7．「来年はこうしてほしい」と思うことはありますか？
8．博物館に、また来たいですか？
9．今度、博物館に来るときは、だれと来たいですか？

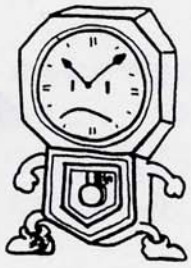
の９項目です。集計結果から、

・博物館にはじめて来た子供が60％と、非常に多いこと。
・祖父母と同居している子供ほど、比較的古い道具を知っていること。
・子供の間では、火鉢が最も知られた民俗資料であること。

などがわかりました。

博物館では、未来を背負う子供たちのために、今後も新旧を結ぶ橋渡しをしていきたいと考えています。

（田中禎子）



## 平成７年度の博物館

| 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 |
|---|---|---|---|---|---|
| 4／28～5／28<br>企画展「藍華やぐ―染めと織り―」<br>庶民の色・藍と木綿。これは、江戸時代に強制されたものであるが、この制約された日常のなかで庶民が追求した美は、彼らの哀歓を感じさせるものである。本展では、「祝い染め」を通して、その世界に迫る。 | | | 7／21～8／31<br>企画展<br>「田所遺跡と光明寺―大溝と墳墓堂―」<br>1992年から(財)愛知県埋蔵文化財センターによって実施されている田所遺跡の発掘調査では、墳墓堂・集落をめぐる溝など、中世における集落の１つの姿を垣間見ることができる。本展では、出土資料を中心に、田所遺跡周辺の歴史を概観する。<br>☆博物館映画劇場　☆弥生機で織ってみよう | | |

| 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|---|---|---|---|---|---|
| 10／21～11／19<br>特別展「川合玉堂－日本の四季と詩情－」<br>近代日本画の巨匠川合玉堂は、明治６年愛知県葉栗郡外割田村（現木曽川町）で生まれ、少年時代を岐阜で過ごし、京都・東京で学ぶなか日本の伝統画法である円山四条派・狩野派を見事に融和させた独自の境地を開いた。本展は、玉堂が多感な若き時代を過ごした濃尾の地で、その足跡をしのび、作品を鑑賞する機会とするものである。 | | | 1／9～2／25<br>企画展<br>「くらしの道具－今と昔－」<br>今年度で５回目となる本展では、歴史を学び始める小学校３年生のために、衣食住という身近な生活道具を展示する。<br>☆博物館映画劇場　☆土器づくり | | 3／10～3／31<br>「第７回手つむぎ・染め・織り展」<br>平成７年度繊維講座受講生・尾張もめん伝承会員の作品展。<br>☆島文楽公演 |

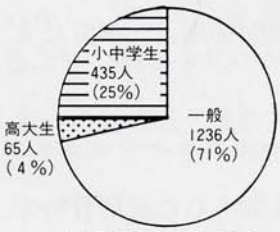
### 【博物館日誌（抄）(6.9.1～12.31)】

6.10.22～11.23　企画展「漁の技術史」

6.11.6　講演会「海の漁－一万年の漁師の知恵」
講師　(財)海の博物館館長
石原義剛氏

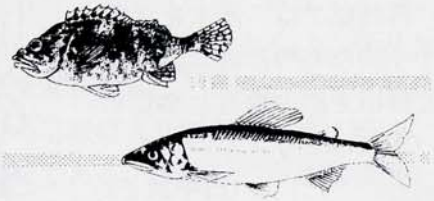
6.11.13　講演会「伊勢湾 古代の漁業」
講師　名古屋大学文学部教授
渡辺　誠氏

### 【展覧会開催中の入館者数】




企画展「漁の技術史」入館者数　1736人/27日

企画展
「漁の技術史
―木曽川から伊勢湾へ―」
10/22～11/23



### 【ご来館有難うございました(6.9.1～12.31)】

フォーラム21少年少女合唱団　邦楽グループN3　一宮市立大和南小学校　一宮市立富士小学校　適応学級サンシャイン138　一宮市立末広小学校６年生　一宮女子短期大学　モスバーガー中京支部　一宮市立神山小学校６年生　南高井子供会　一宮市立浅井中学校　稲沢市立千代田小学校６年生　一宮市立大和西小学校６年生　稲翠会　市長公室企画課　稲沢市文化財愛護少年団　名古屋市博物館小学生歴史教室　一宮市社会福祉協議会　一宮市経済部商工課　一宮中ライオンズクラブ　一宮市立千秋中学校１年生　岐阜県建築士会飛驒支部　稲沢市立国分小学校２年生　第30回市民文化財めぐり　裏千家淡交会愛知第一支部尾張青年部

一宮市博物館だより　第19号
平成７年３月20日
編集・発行　一宮市博物館
〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地
TEL0586-46-3215
FAX0586-46-3216